

駐ストックホルム・小野寺信武官夫人、小野寺百合子氏 との会談（1993年9月10日）覚書

Interview with Yuriko ONODERA, Held on September 10th, 1993

渡辺 克義
Katsuyoshi WATANABE

はじめに

第二次世界大戦中、日本とポーランドの間で諜報をめぐる興味深い協力関係があったことはあまり知られていない¹。その研究の空白を埋める意味で、本会談覚書は多少の貢献が果たせるのではないかと思ひ、14年以上の歳月を経たいま明らかにするしだいである。

諜報の研究には多くの困難がある。対象が対象だけに、現存する史料が少ないことに加え、当事者が戦後もこの件で口を開かず、ついには鬼籍に入ってしまう場合が普通だからである。ここで対談に応じてくれた小野寺百合子氏の場合も、『バルト海のほとりにて——武官の妻の大東亜戦争』（共同通信社、1985年）が刊行されることがなければ、夫の信氏（1897-1987年）の活動も長く知られることがなかったか、あるいは完全に歴史の闇に葬り去られる道をたどっていたかもしれない²。

小野寺百合子氏は1906年、東京の生まれ。東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）附属高等女学校専攻科卒。1927年、小野寺信・陸軍歩兵中尉と結婚。ラトヴィア公使館付武官、スウェーデン公使館付武官となった夫とともに7年間にわたる在欧生活を送った。トゥーヴェ・ヤンスンの「ムーミン」シリーズほか、多くのスウェーデン語文学からの翻訳、その他でも知られる。1998年3月、逝去。

* * * * *

渡辺：杉原千畝^{ちうね}氏が情報蒐集源としていたポーランド人間諜ヤクビャニェツ³（コードネーム——クバ）やダシュキェヴィチ⁴（コードネーム——ペシュ）とは、小野寺武官は直接・間接の接触を持っていましたか？

小野寺：小野寺はそれらのポーランド人間諜について知っていたとは思われません。私自身は、どちらのポーランド人についても聞いたことがありません。杉原さんとはそんなに親しくしていませんでした。

渡辺：ということは、小野寺武官と杉原氏との間で情報交換をやっていたということは……

小野寺：ぜんぜんありませんでした。

渡辺：つまり、それぞれが独自のルートで情報蒐集をしていたということですか？

小野寺：ええ、そうです。私が杉原さんとお会いしたのは戦後のことで、それも娘〔大鷹節子氏？〕の嫁ぎ先が杉原さんのお宅の近くということで、一、二度、お茶にお呼ばれされた程度です。主人同士はそれ以前から多少の付き合いがあったようですが……

渡辺：小野寺武官はベルリンによく行っていましたか？

小野寺：ええ、よく行っていました。

渡辺：すると、小野寺武官と杉原氏はベルリンで会っていたのかもしれませんが。

小野寺：そうかもしれません。

渡辺：ルビコフスキ⁵が組織した諜報ネットワーク“L”のほかに、ストックホルムには“Anna”という同じくポーランド人の諜報組織がありました。同組織は、最初ルドニツキ（Rudnicki）により、次にピョトロフスキ（Piotrowski）により指揮されていましたが、これらの人物と小野寺武官は接触がありましたか？

小野寺：まったくありませんでした。

渡辺：では、小野寺武官の情報源はルビコフスキだけだったのですか？

小野寺：いいえ、もうひとり、エストニアの第II部（諜報）のマーシング（Richard Maasing）がいました。小野寺は、情報源が2つあることは大事なんだと言っていました。「2つの情報源からの情報が一致した場合に、その情報は信用できるんだ」と、小野寺はよく言っていました。

渡辺：小野寺武官は複数の情報を照らし合わせ、それらを基に正しいと判断した情報を東京に送っていたわけですね。

小野寺：そうです。「マ情報」と「ブ情報」とがありました。前者はマーシング発のもの、後者はルビコフスキ発のものを指しました。「ブ」とは、ルビコフスキの上官のブジェスクフィンスキ⁶のことです。

渡辺：『ザ・スパイ』には、「彼〔ルビコフスキ〕は、小野寺のもっとも信任あつい助手として働きつづけるかわら、イギリスのための仕事もしていた。イギリスは調査した情報を、日本側を經由してドイツに流すパイプとして彼を使っていた」とありますが⁷、その真偽について小野寺さんほどのように思われますか？ イギリスが故意に偽情報を流すこともありえたのでしょうか？

小野寺：ありえたことだと思います。

渡辺：ルビコフスキが自分の得た情報が偽情報だと判断した場合、小野寺武官に伝えていなかった場合も当然あったでしょうね。

小野寺：ええ。いずれにしても、マ情報との間に隔たりが大きければ、ブ情報をそのまま日本に送ることはなかったでしょう。

渡辺：たしかに、そのような場合には、小野寺武官は持ち込まれた情報に疑いを抱いたでしょうね。

小野寺さんは回顧録⁸でブジェスクフィンスキについてはそれほど触れていらっしゃいませんが、リガおよびストックホルムでの彼との関係についてもう少し詳しくお話し願えますか？ また、ストックホルムではブジェスクフィンスキとルビコフスキはどのような付き合いをつづけていたのですか？

小野寺：私はストックホルムではブジェスクフィンスキに会っていません。ポーランド亡命政府はイギリスにあり、日本とイギリスは交戦状態にありましたから、ブジェスクフィンスキとは故意に会わないようにしていました。

渡辺：戦後はお会いになっていますか？

小野寺：私は会っていません。小野寺はリガ駐在時にはブジェスクフィンスキと付き合いでしたが、情報交換が目的というよりは、武官仲間としての付き合いだったようです。

渡辺：ブジェスクフィンスキと小野寺武官との付き合いは、小野寺武官の（リガ）赴任直後からでしたか？

小野寺：ええ、赴任直後からです。

渡辺：ブジェスクフィンスキ発の情報は精度の高いものだったのでしょうか？

小野寺：リガ駐在時代に、東京の参謀本部で評価された情報の出処は、ブジェスクフィンスキではなく、ラトヴィア政府発およびマ情報でした。さきほど申し上げたように、ブジェスクフィンスキと

の付合いは友人付合いに限られていました。

渡辺：リュビコフスキはドイツ情報を中心に流し、ドイツ軍がそれほど強固なものでないことを強調していたのは理解できるのですが、はたしてポーランド側の諜報能力がそこまで精度が高く、いつも信頼に足るものであったのかは疑問に感じます。例えば、1944年のワルシャワ蜂起の直前には、国内軍総司令部はワルシャワ近郊のドイツ軍の正確な配備も把握しておらず、赤軍の主力の位置すら誤っており、あまりにも拙劣な作戦開始命令を下していました。一般的には、ポーランドの諜報能力は低かったと私は考えているのですが……

小野寺：ポーランドは独ソ両国に分割されていますが、リュビコフスキ“一味”は、ドイツ軍が越境してくると（ポーランド）中央政府に伝えていました。これが、小野寺がリュビコフスキの諜報能力を高く評価することになった一要因です。

渡辺：たしかにポーランド側の諜報能力には優れた面もありました。ドイツの暗号機「エニグマ」解読の背景にはポーランド人の功績がありました。問題は、持ち込まれた情報を評価する側（上層部）にあったのかもしれませんが。

杉原^{ゆきこ}幸子氏は『六千人の命のビザ』で、「スウェーデンに武官として駐在されていた小野寺少将もナチスの手からユダヤ人を救った人だと聞いています」と記していますが⁹、このあたりの事情についてお話し願えますか？

小野寺：これはまったく事実ではありません。杉原さんの考え違いです。

渡辺：杉原氏はさらに、「カウナスを離れてから夫は小野寺さんにお会いし、戦後も手紙のやりとりをしていたようです」と記していますが¹⁰、これは事実ですか？ また、その時の書簡は現存していますか？

小野寺：これも誤解です。手紙のやりとりはございませんでした。戦後にお会いした経緯は、先ほど申し上げたとおりです。

渡辺：サビナ・ワピンスカ（Sabina Łapińska）¹¹については何かご存じですか？

小野寺：まったく存じあげません。

渡辺：『ティアガルテン』¹²の内容についてどう思われますか？

小野寺：リュビコフスキが同書の一部を英訳してくれたので読んでみましたが、ほとんどがフィクションだと思います。

渡辺：注もなく、出典も示めされていないので、史料として利用しづらいのですが……

小野寺：振返ってみると、小野寺は、リュビコフスキと関係があったということで、彼に迷惑がかかるのではないかという点をいちばん気にかけていました。巣鴨での取調べの時もそうでした。

リュビコフスキが戦後に小野寺に宛てた書簡によると、資料はすべてワルシャワの公文書館に寄贈したとのこと。小野寺はこれで安心しました。リュビコフスキが自分で諜報の件を明らかにしたわけですから。

渡辺：おっしゃるように、リュビコフスキの偽造旅券はワルシャワの軍事博物館にあり、展示されています。しかし、そこは博物館であって、公文書館ではありません。もしかしたら、館長に頼めばリュビコフスキ関係の文献を見せてもらえるかもしれません¹³。

『産経新聞』¹⁴によると、ソ連の対日参戦がきまったヤルタ協定について、小野寺武官はブジェスクフィンスキからその情報を得たとあります。小野寺武官はやはりブジェスクフィンスキとの間に軍事的に直接的なつながりがあったのではないですか？

小野寺：リュビコフスキがストックホルムを発つ時、情報はブジェスクフィンスキ経由で届けると約束があったのです。後からわかったことですが、リュビコフスキはイタリア戦線で戦っており、諜報から離れていたとのこと。つまり、リュビコフスキの部下がブジェスクフィンスキに情報を渡し、それらがストックホルムの小野寺の許に届いていたのです。私たちはずっと発信源はリュビコフ

スキだとばかり思っていました……

渡辺：ゲシュタポは、ルイビコフスキ逮捕のためにイタリアまで追いかけて行くということではなかったのでしょうか？

小野寺：それはなかったようですね。ただ、ストックホルムではゲシュタポに命を狙われていましたが……

渡辺：ルイビコフスキは諜報に加え、実戦部隊でも功績があったわけですから、軍人としてはすばらしいものがあったと言えるのではないのでしょうか？

小野寺：すばらしい、と小野寺は言っていました。

渡辺：ルイビコフスキはロシア情報も与えていましたか？

小野寺：ドイツが対ソ戦に入る前に、（ルイビコフスキは小野寺に）詳細な軍備配置を示しました。ドイツ軍には冬の備えもなく、必ず敗北する、とルイビコフスキは言っていました。小野寺がその情報を東京に打電しても、参謀本部は大島大使¹⁵からの情報ばかり信じていました。

渡辺：大島大使はドイツ最良でしたから……

私は小野寺—ルイビコフスキ関係に興味があるのですが、史料がなかなか見つからず、苦勞しています。

小野寺：事の性格から、現存する史料は少ないでしょうね。

渡辺：これから研究を進めていく過程で、また質問が出てくるでしょうが、その時はよろしくご教示ください。

小野寺：どうぞ、どうぞ。

注

1. この関係で邦語で読める文献として、さしあたり次を挙げておく。エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル（吉上昭三・松本明訳）「第二次世界大戦と秘密諜報活動——ポーランドと日本の協力関係 コヴノ、ストックホルム、クルレヴィエッツ、ベルリン1939—1949」『ポロニカ』（第5号、1995年）。
2. 書籍の刊行に加え、NHKが「NHK特集 日米開戦不可ナリ ～ストックホルム・小野寺大佐至急電～」を制作・放送（1985年12月8日）したことで、小野田武官の功績が認知されることとなった。
3. Alfons Jakubianiec <Kuba>. ポーランド人間諜、1905—1945年。駐カウナス・日本公使館臨時公使杉原千畝と情報交換を行っていた。
4. (Tadeusz) Stanisław A. Daszkiewicz <Perz>. ポーランド人間諜、1905—?年。ヤクビャニェツと共に、杉原千畝と情報交換を行っていた。
5. Michał Rybikowski. ポーランド人間諜、1900—91年。駐ストックホルム・日本公使館付武官小野寺信少将と情報交換を行っていた。
6. Feliks (Teofil Fortunat) Brzeskiński, ポーランド人間諜、1896—1960年。1936年3月～39年9月、駐リガ・武官。39年10月～45年7月、駐ストックホルム・武官。
7. ラディラス・ファラゴ（中山善之訳）『ザ・スパイ——第二次大戦下の米英対日独諜報戦』（サンケイ新聞社出版局、1973年）203頁。
8. 小野寺百合子「小野寺武官の“戦い”」『正論』（第5号、1993年）、同『バルト海のほとりにて——武官の妻の大東亜戦争』（共同通信社、1985年）
9. 杉原幸子『六千人の命のビザ』（朝日ソノラマ、1990年）45頁。
10. 同上。
11. 駐ベルリン・満州国公使館勤務のポーランド人で、クーリエとしてスウェーデンにしばしば出張していた

た (Andrzej Pepłoński, Skandynawia i państwa bałtyckie [w:] *Polsko-brytyjskie współpraca wywiadowcza podczas II wojny światowej*, t. I, *Ustalenia Polsko-Brytyjskiej Komisji Historycznej*, Warszawa 2004, s. 346)。

12. Stanisław Strumph Wojtkiewicz, *Tiergarten. Powieść z lat 1939-1945*, wyd. V, Warszawa 1978.
13. 後にワルシャワ軍事博物館でルイビコフスキ・ファイル (Plk Michał Rybikowski, syg. 7 W II C) を閲覧することができた。このファイルにロシア語で記された杉原千畝手記が“紛れ込んでおり”, それについては訳出している (「杉原千畝手記」(渡辺克義訳)『北欧史研究』第15号, 1998年)。
14. 「ヤルタ協定 ソ連の対日参戦, 半年前に打電…」『産業経済新聞』(1993年8月13日夕刊)。
15. 大島浩, 1886—1975年。駐独特命全権大使 (1940—45年)。極東国際軍事裁判ではA級戦犯として終身刑の判決を受ける。1955年に減刑, 出獄。